幼稚園の生活形態

——新しい幼稚園の研究課題として——

倉橋惣三

○保育方法の前に保育形態

保育の實際の方法は家庭でやつても、極端には電車の中で十五分保育をする場合にも變らない。又保育の原理ということも、家庭にも共通している。ところがお互いにとつてよく考えておかねばならぬのは、幼稚園という「仕組み」に於てやる保育の問題である。幼稚園は家庭でなく、野原でなく、一つの特定の場であり、その場に於ての保育の方法が考えられなくてはならない。ところが、從來往々にして、保育の方法が、いかに行わるべきかの苦心が止まつて、幼稚園という「場」に就ての考え方が意外に少なかつた。そこでわれ〳〵が考えねばならぬ第一は「幼稚園という所に於ける幼兒の生活形態」である。あなたが幼兒をどう扱うか、その根本原理が幼兒に卽しているか、ということの前に、幼稚園という場の研究が大事である。これが本當に行われなければ幼稚園教育は正しく行われるわけではない。實際には、これは必ずしも幼稚園のみでなく、學校でも同じである。學校では教授法などのその根本に心理的原則がたてられてはいるが、學校教育がどんな場であるかについて先ず考えられなければ、學校教育は正しく行われない。學校がどうなつたら教育として本當の場になるか、或は又、どういう風にむけて行つたらその無理が少くなるかということを考えなければならない。すなわち方法の研究の前の前の研究が出るのである。そこで學校の方でいえば、例えば朝子供が登校し、それ〳〵の組にはいる。組は分れて定員がある。そして學校的生活形態に於て机があり人がいる。われ〳〵はこれを疑いなく學校とはそういうものだと、しきたりに於てみている。學校を作るにもそのしきたりに於て建てる。鐘が鳴つて定員がはいつて來るのが學校だなと思つて不思議がらない。そしてその場で教え方等を方法として考える。それも大事だが、その前に場を考えなければならない。ここで場所といわず、場というのは、「場所」とはただ空間的な物をいうのに對して「場」とは、時間的變

化を含むもので、場所というより生きているものである。

アメリカでいうニュースクールでは、必ずしもニューメソッドを用いるのみならず、スクールという場を新しい場に變えていく。そこに問題があるのである。日本の學校とアメリカの學校とを假りに比較してみよう。日本の學校の教室は、四間に五間、二十坪が教育の場としてこれまで何の疑いもおこさなかつた。そこへいろ〳〵の物が置かれ、はいれる丈の子供が入れてあり、それだから、或意味では殆んど身動きも出來ない狀態におかれたりしている。身動きが出來ないから動いたのがはつきりするし、すぐ他人をも邪魔する事になる。今日では、燒けて建て直す時には廣い場所は望めないので、三間に四間の小さい教室すらある。狹くなればそこへ入れる人を減らせば同じではないかというが、今日ではより多く入れなければならない狀態である。すると子供の所有している場は、與えられたるあれ丈の場である。それをも我々は疑わない。その中で上手に畫を描かせる法、歌を歌わせる法を研究する譯になる。しかし、新しい學校とは、その中で子供が自由に動けるのをいう。日本で古い學校を見つけた人はいうであろう。これは教室か、控室か、クラブかわからないと。これは方法でなく場の違いである。ところで、幼稚園とは幼兒の爲に如何なる場なのであろうか。幼稚園で先生が朝幼兒に「何しに來たの」と聞くとする。子供は「お話をききに來た」というかもしれない。お話にはただ椅子があればいゝ。そしてそれはたか〳〵お話の間の事で、その椅子は柔い方がいゝ。又、よりかかりのある方がいゝ。しかし話しをきく場が幼稚園なのではない。幼稚園で話しをきくのである。映畫をみる場が映畫館である。故に映畫館はよくみえるように作つてある。映畫館で映畫がみえなかつたらつまらない。けれどもクラブへ行けば映畫がみえなくても共に樂しむクラブがある。幼稚園はお話をききに來る子に聞かせる處、すなわち演劇をみに來るものゝための劇場と同じ譯のものであろうか。或はそういう風に考えられているのではないか。これに對して我々は、畫の描き方、お話のし方の前に、そこは幼兒の生活形態の場として適當か否かを考えねばならないと主張する。まず考えなければならないのは、幼兒達が來て「生活」しているのである。そこで生活形態を考えずして方法へ行くのは本當のものになり得ないのである。そこでお互いの幼稚園を幼兒の生活の場として考えなおしてみよう。これは大事な根本的なものである。

生活の場としての幼稚園

我々は金魚を買つて來て器に入れる。鑑賞する爲に買つて來たのだから、丸い器に入れてみる。その小さな物の中に入れる事は金魚には氣の毒だが、とにかく、泳がせる場である。泳ぐのは生活の場である。誰だつて金魚の泳ぐのを禁じる者はない。或は金魚に藝當を教える人があるかもしれない。それにしても一應ある廣さを持つた處に泳がしてみてその上の事である。魚は泳ぐべし、鳥は飛ぶべし。幼兒丈が何

間に何間の間に靜かにお話をおききなさいといわれるとしたら、それは幼兒の生活形態として自然なことであろうか、その教育目的に於て是認する前に生活形態に於て疑いがある。「私は幼兒を學校教育法に基いて教育したいと思う。その方法には熟達している。しかしどうしても子供達をあの幼稚園へ入れて來るのがいじらしくてたまらない。だからこちらから出かけて行つて、公園に草原に砂濱に、幼兒が自然に生活している處に持つて行つて保育したい。」――こういう人があれば、私は敬意をはらう。これを「出かけ保育」といおう。集まつている子供について保育を始める。丘のなだらかな處で、集まつている子供を保育する。これは、方法を適用すべく幼兒を特殊な場におかないのである。こういう事は、生活の場として愉快な事である。私は昔からそういつていた。例えば此處に保姆さんの元締めをおく。何千人、何百人保姆さんがいてこれをあちこちに派遣する。おまわりさん、消防夫を派遣するように。夕方子供が歌つていそうなところへかけつけて貰う。それも大げさに更つた顏（教育顏）をしてかけつければ、子供達はびつくりして散つてしまうかも知れないから、何氣ない通りかゝりのような顏をしてよつていく。こういう行き方をすれば幼兒の生活形態を自然に保てる。一人が病氣になつた時、病院にいらつしやいというのでなく、病人の寢ている所へ出かけて行くのが派遣婦なら、これは派遣保姆であろう。若し子供の集まつていそうな處をあちこちさがすのが大へんといわれるかも知れないが、町の紙芝居の小父さんは實に子どもの集まりそうな場所にうまくいくのである。幼稚園をそういう場に比較すると、何と無理な、こしらえた處かと氣がつく。學校はその場に入る者が相當成長して、教育を受けるの必要を自ら知つている。從つて、教育を受けるに都合よくこしらえられた場にはいる事を何とも思わない。しかし何もわからない幼兒は、家庭や往來と違う場に、監禁とまではいかぬが、靜かにさせられているのとしたらどうであろう。私が幼兒なら奇妙な處だと云うだろう。「あなたの部屋はここだ」「あなたの組はここだ」と教えられる。椅子を置いてそこより一歩も動く事相ならんという。そして先生はいう。「ちやあんとそろいましたか」「保育を受けるに都合よき姿勢をととのえたりや」と。われ〳〵はこれらを疑いなくやつているが、これはいつたい幼兒の生活であろうか。

こういうと全く新らしい形で幼稚園を作らなければならないことになるが、それまでのことでなく、今のような部屋でも、出來る丈生活の場とすることは出來まいか。これはどんなおもちやをえらぶ、繪本をえらぶかということより前の仕事である。魚を泳がして行くことなしに、魚に何が出來よう。本當に育てるなら、動かす事が本當ではないか。幼稚園も保育の方法を受けとらせるに便宜に幼兒をはめこむに止まらずして、本當に彼等の生活をさせることを考えねばならない。今日の新らしい學校もそういう方に向いている。幼兒の場合には一層それが大切である。

幼稚園における幼兒の生活

そこで生活形態を考える上から、幾つかの問題に分けて考えられる。最初に「生活」とはどういう事か。よき幼稚園とは幼兒をしてより多く生きた生活をさせる事である。そのよき生活とは何か。これを考えるについて、幼兒を中心にして、生活には三つの種類がある。

一つは假りに『實際生活」という言葉を用う。私がこれを始めに上げたわけは、大人のいう生活では大體そこに重點をおくからである。「生活にあくせくしている」といつたりする場合の生活である。大人のいう生活は實際生活である。子供はそうした意味での實際生活の外にある。しかし子供にも必要に基ずいた生活々動はあるのである。もとより極く小さい子は必要まで行かないで、外から生活させられている方が多い。しかし子どもでも大きくなるにつれて必要生活が始まる。又そういう年齢になると、人間の心理の本來として、必要を感じるのが愉快になつてくる。ところで、必要とは外にある。外にある必要をこちらの物にしたのが目的である。そうして、必要が外にあると重荷であるが、それが自己の目的にうつり代ると愉快になる。幼稚園に來て靴を脱ぐ必要がある。しやがんで靴箱へ入れる。外套をぬぐ必要がある。背のびして自分のくぎにかける。皆必要が目的に置きかえられた喜んで時の愉快である。このように幼兒も必要を感じて實際生活をしている。

ところが必要によらないで動いている生活がある。假りにこれを「自然生活」という。必要に迫られた事でなく、目的というみつめた事でもない。おのずからに出てくる生活々動といおうか、人がいれば人のそばへ行く、描きたくなつて畫を描き、作りたくなつて粘土を作る、別に必要を感じ、目的をもつのではないが、人や物と自分との間に興味關係が起るのである。大げさにいえば「關心をもつ」といおう。その興味關係を活動に出してくると生活となる。人にあえばにこりとする。話しをする。あいさつをする。あいさつというと社交になるが、自然生活をしているのである。物を見ればいぢりたくなる。描きたくなり、作りたくなる。矢張り自然生活をしているのである。

ところがこの他にもう一つ生活がある。これは他の世界ではあまりない。學校という教育目的をもち教育方法を適用している世界に多い生活である。これを便宜上名づけて「課業生活」という。課業とは實際生活でも自然生活でもない。例えば手紙を書く場合「何日何時、用があるから來てくれ」というのは實際生活であり、「君を思い出していつかは樂しかつたね」というのは自然生活であり、「今日は手紙を書く稽古をしてごらん」と目的も興味も人間交渉もなしに手紙を書くのは課業生活である。こうして稽古をしておくと後に役に立つが、それ自身生活性が含まれていない。しかも、學校でも幼稚園でも、それを主にしている。子供が「つまんないや」と云つた時「私達もそうやつて習つて來たのだよ」「とい

つて片づけている。何と、生活という事からいえば不自然な事であろう。私は幼兒の爲に、何の理由あつて課業生活をしなければならぬかを疑う。そのさせ方の方法が優れている爲、幼兒にも無理はないと思われて居り、幼兒も方法の巧みにのせられて樂しげにやつているが、これは少しも眞の生活性のない事ではないか。但し課業生活が絶對にしてはならぬ事だとは云うのではないが、けれども課業生活を少しも疑わないのは間違いである。生活の場ならば、何故に自然生活と實際生活を豐富に指導して行く事が考えられぬのか。課業生活指導のみ巧者なのがすぐれた先生ではあるまい。

そこでこの三つの生活を考えて來て、生活としては自然生活と實際生活が十分に出來る生活形態の場に幼稚園をしたいではないか。

さてこゝで「自由遊戯」について少し述べよう。自由遊びの幼稚園における位置はいろ〳〵に變遷している。極端にいえば、こういう考え方もあつた。自由遊戯は子供にとつて樂しい事はわかつているが、それは家庭や、往來でやればよい。幼稚園という折角の教育の場所では勿體ない。幼稚園は課業生活を本體とするから遊び場ではなくはないよ、單なる遊園ではないよといつた考である。これは極端に云つたのであるが、若し先生にして、自由遊戯を許さざるにはあらざれど、幼稚園として積極的に尊重しないとすればこの考え方に似ている。その際、幼稚園における自由遊戯は、たかだか、課業生活の間の休息としての價値が認められるという形である。つまり、課業生活を本體として、自由遊戯をとり入れるというにすぎないのである。

その次は、自由遊びを本體として、その中に課業生活をとり入れるのである。これは方法論的にいろ〳〵考えられることであるが、それは暫く別にしておくとして、生活形態論としては課業生活と自由遊戯とは別の世界であるという考え方である。ところで、或人が私にむかつて「まだ自由遊戯という言葉を使つていますね」といつた。課業生活としても自由なるべきものである。そこに自由遊戯という言葉はない筈だという意味である。昔或席でこういつた人があつた。「私は幼い頃幼稚園にあらざる幼稚園に行つていた」と。これは自由遊戯なんてもと〳〵あたりまえのことだよ、幼稚園の出來ない前はみんなそうだつたから、という意味である。われわれはとかく、或形の幼稚園をきめてそれから變つて行くのを、新らしいことのように思うが、自由遊戯は、元來が幼兒のあたりまえであり、幼稚園のあたりまえである。それを先生は「當幼稚園ではこんなに自由遊戯をさせています」という。させるといつた特別のことではないのであるのに。